

日本英語学会第34回大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月12日午後)

司会 小畑美貴 (東京理科大学)

「日本語ニ受動文における受影性の起源 ～意味役割理論と格配列理論からの帰結 ～」

加賀信広 (筑波大学)

Kuroda(1979[1])は、日本語ニ受動文の主語は常に受影者(affectee)の役割をもたなければならないと主張した。たとえば、「あの町は日本軍に破壊された」はよいが、「あの町は日本軍 {*/に/によって} 建設された」や「詳しい調査が政府 {*/に/によって} 行われた」では、主語が影響を受ける対象ではないので、ニではなくニヨッテを用いなければならない(益岡(1991)なども参照)。しかし、旧主語がニで表示される場合には、なぜ受動文の主語が「受影者」に限定されるのであろうか。この設問に対して、単なる規定ではなく、理論的な説明を与えた研究はこれまで存在していないと思われる。本発表では、この問題の理論的な解明を目標に据え、Kaga (2007[2])の意味役割に関する提案と、Baker (2015[3])による依存格(dependent Case)の枠組みの下で日本語の格配列に関して新たな分析を提示することにより、ニ受動文とニヨッテ受動文の相違を明らかにしたい。

[1] “On Japanese Passives.” [2] *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*. [3] *Case: Its Principles and its Parameters*.

「As-引用節、So-倒置文、比較倒置文における動詞句削除」

前田雅子 (九州工業大学)

本発表は、as-引用節、so-倒置文、比較倒置文が、null Operatorの移動や虚辞の生起、動詞句削除などに関して興味深い統語的類似性を示すことを明らかにする。

また、上記構文において削除される動詞句は先行詞との局所性を必要とすることから(Potts (2002[2])), 動詞句削除の方法として認可詞との隣接性が要求される[E]-feature分析やphaseのtransfer分析は妥当ではなく、CP/vP領域への話題化移動分析が妥当であると提案する。さらに、上記の倒置文では複数の助動詞が主語の前に生起できること、主語は対比焦点を担うことから、動詞句の話題化移動に加え、主語も階層化されたvP領域へ焦点化移動すると主張する(cf. Lacara (2015[1])). また、倒置文において否定辞や目的語が許されないことなどをRelativized Minimalityにより説明することを試みる。

[1] “Discourse Inversion and Deletion in As-parenteticals,” *Parenthesis and Ellipsis: Cross-linguistic and Theoretical Perspectives*. [2] “The Syntax and Semantics of As-parenteticals,” *NLLT* 20.

「修辭疑問文解釈における統語的制約」

中島崇法 (東北大学大学院)

本発表の目的は統語論と意味論のインターフェイスに課される一般制約を提案することである。極小主義プログラムの枠組みでは、統語派生の出力として得られた構造がその文の意味解釈(これをS1とする)となる。しかしながらS1に対し更に意味操作を適用しS2が得られた場合、どのような制約や条件がS2の適格性を定めるのかは必ずしも明らかにされていない。一方本発表では、意味操作が施された後の構造S2も統語部門で派生可能な形式を保持していなければならないと提案することで、上記の問いに解決を与える。

本発表ではこの提案に、修辭疑問文の否定解釈の分布から支持を与える。具体的にはまず、修辭疑問文において従属節否定の解釈が可能なのはその環境が否定繰り上げを認める場合に限られるという一般化を提示する。そして否定繰り上げの統語分析(Collins and Postal (2014[1]))に基づき、この一般化が上記の提案の帰結として導かれることを示す。

[1] *Classical NEG Raising: An Essay on the Syntax of Negation*.

第二室 (11月12日午後)

司会 本間伸輔 (新潟大学)

「be動詞の比較削除構文について」

佐藤元樹 (福島大学)

本発表では、be動詞の補部が空所となる比較削除構文について考察する。

(1) a. John is taller than Mary is.

b. John has more friends than Mary has.

先行研究では、be動詞の比較削除構文は、一般動詞の比較削除構文と同類のものとして扱われており、比較節内の空所は移動の結果生じたものであると考えられている(Chomsky 1977 [1])。

しかし、be動詞の補部が空所となる現象は、比較節に限定されたものではなく、Akmajian and Wasow (1975)[2]が提案しているように、一般的な省略 (ellipsis) の一種である動詞句省略の可能性がある。本発表では、実際に、動詞句省略の特性がbe動詞の比較削除構文においても観察される事例を示し、be動詞の比較削除構文には移動による派生だけではなく、動詞句省略を適用した派生の二種類があることを明らかにする。

[1] “On Wh-Movement.” [2] “The Constituent Structure of VP and AUX and the Position of the Verb BE,” *Linguistic Analysis* 1, 205-245.

“Syntactic and Semantic Analyses of the Geisian Ambiguity”

Masaki Sano (Ritsumeikan University)

The topic of this presentation is the Geisian ambiguity [1] between the high and the low readings (HR/LR) in a sentence like *Boku-wa Godzilla-ga arawareru to Yamane hakase-ga yokoku-sita toki-ni Godzilla-o mita* “I saw Godzilla when Dr. Yamane predicted it would appear.” The main concern is with what factors affect the availability of LR and why. Besides the well-known island configurations, there are several controlling factors, including: the presence of a

particle like *ni* after the head of the adverbial clause [2]; the lexical nature of the head (*toki* vs. *zikan* “time”); its aspectual nature (*toki* vs. *aida* “while”); the lexical and/or aspectual properties of the predicates involved (*arawareru* vs. *syutugen-suru* “appear”; *yokoku-suru* vs. *keikoku-suru* “warn”). I will attempt to give syntactic and semantic accounts for interactions of these factors, largely unrecognized in the literature (except the first one).

[1] Geis, M. (1970) *Adverbial Subordinate Clauses in English*, Doctoral dissertation, MIT. [2] Endo, Y. (2012) “The Syntax-Discourse Interface in Adverbial Clauses,” *Main Clause Phenomena*, Benjamins.

「多重スルーシングの派生について」

平井大輔 (近畿大学)

英語のwh疑問文では複数のwh句が前置されることは許されないが、間接疑問文などにおいてwh句以外の部分が削除されれば文法的となる多重スルーシング(以下、MS)という現象がある。これは、「削除操作は句範疇に適用する」という一般的な仮定から見れば、非常に奇妙な現象であり、どのように派生されるのかは未だ明らかではない。そこで、本発表では、MSの派生について極小主義理論の枠組みに基づいて説明を試みる。具体的には、MSでは、削除節内のwh句は、Baker (1970[1])で提案されたQ-morphemeにより、無差別に元位置で束縛され、削除節は最小の構造のみ構築されることを主張する。さらに、動詞句(VP)削除等の説明において提案されたLFでの構造的パラレリズムをMSにも適用し、先行節と削除節のそれぞれの対応する範疇(フェイズ)同士のLF構造が同一であれば、演算子と変項以外の要素が構成素をなしていなくても削除(Partial Deletion)が可能となり、MSが派生されることを提案する。[1] “Notes on the Description of English Questions: The Role of an Abstract Question Morpheme,” *Foundations of Language* 6, 197-219.

第三室 (11月12日午後)

司会 鈴木亨 (山形大学)

「イントネーション習得の諸相—音韻、統語、語用の交差するところ」

上田功 (大阪大学)

本発表の目的は、1) 日本人学習者のイントネーション習得過程のモデル化を試み、2) レベル別におこなった実験の被験者の発話データから、学習者の誤用にみられる特徴に注目し、3) それらを言語学的に考察し、4) 最終的にはイントネーションが、音韻論、統語論、語用論の複数の部門にまたがる現象であり、ために多面的な考察が必要であることを論ずる。

具体的には、まず初級学習者は、ピッチ変化に関係する純然たる音韻制約に支配され、習得が進むと、特定の統語カテゴリーに関して核の誤配置を見せる (斎藤・上田 (2011[1]), Ueda and Saito (2012[2])). さらにこれらを克服して母語話者の運用能力に近づいても、態度機能等の語用論的な制約が克服すべき課題となる。このように、日本人学習者のイントネーション習得の過程は、様々な分野が複雑に重なり合うインターフェイスの領域と言え、それ故完全な習得は非常に難しいことを論ずる。

[1] 「日本人学習者によるイントネーション核の誤配置」 『音声研究』 15(1). [2] Tonic misplacement by Japanese learners of English. *Exploring English Phonetics*. Cambridge Scholars Publishing.

「こどもの発話における構文の意味と形式の対応関係—英語の動詞不変化詞構文を対象として—」

本多明子 (至学館大学)

近年、構文文法に基づく構文研究は盛んに行われ、構文特有の特性が明らかになってきており、その成果が着実に言語の習得研究に対しても現れてきている。本研究で注目する英語の動詞不変化詞構文 *The child took her shoes off/ The child took off her shoes.* の習得に関しては、こどもの使用頻度が高く (MacWhinney (2000[1]), Diessel & Tomasello (2005[2])) は、幼児初期の発話では、不変化詞は常に直接目的語の後ろに置かれているが、二歳頃になると、こどもは不変化詞を直接目的語の前後の位置で使うようになると指摘している You put on lipstick on [Eve 2;1]. 本発表では、幼児期のこどもがそのどち

らの形式を発話の中で使用するかは、動詞不変化詞構文の意味構文的特性とこどもの発達過程における自分の周りの状況や事象の認知のあり方との連動が関わっており、意味と形式は一对一の対応関係になっている傾向にあることを示す。

[1] *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*
[2] “Particle Placement in Early Child Language: A Multifactorial Analysis.”

「As、With、分詞構文における同時性と因果性の意味読み込み：英語指導要領を実施するための一提言」

花崎美紀 (信州大学)

As, with、分詞構文の意味は大部分重なり合う。本発表は、NOWコーパス等のデータを分析し、3言語形式に共通する「意味」であるが、多義研究で多用される「家族的類似性」を認めることが難しい<時><理由><譲歩>の「意味」がどのように生まれるかを論じることを通して、以下5点を主張する。(1)一般的に「意味」と呼ばれるものは、その言語形式がもつ「意味」でなく、会話参加者が行う「読み込み」(推論)の結果であることがある。(2)多義は、比喻ばかりでなく、人間の認知の傾向性により産まれることもある。(3)当該言語形式は、2事態の同時性を表し、会話参加者は2事態の時間的幅により解釈を決定する。(4)当該言語形式の解釈には、2事態の順序が影響する。(5)因果性の解釈を教えることが、論理的思考力を重視する新英語指導要領の円滑なる実施に寄与する。

第四室 (11月12日午後)

司会 秦かおり (大阪大学)

「集合知としてのクラウドソースと英語翻訳のグローバル化について—日本のコンテンツを事例として—」

井上逸兵 (慶應義塾大学)

本発表は、アニメその他の日本のコンテンツが、クラウドソース翻訳やいわゆる「ファンサブ」(ファンらがインターネット上でボランティア的につけた字幕翻訳) を介して英語化される事象を、公式翻訳や産業界などで進行してい

る「グローバルテキスト」の発展との関わりで論ずるものである。「コミュニケーションの生態学(井上2005, 2015)」の視点も加味しながら、テクノロジーの進化と社会・経済のいわゆるグローバル化にともなうリーダビリティ(readability)の変化が、グローバルなコンテキストにおける英語にも変容をもたらしている様相を取り上げる。現代のネット社会、グローバル社会の言語実践の事例としての日本コンテンツの英語化、英語翻訳を論じ、他方で行われているローカル化翻訳と対比させながら、グローバル化翻訳の動向を見てみたい。社会言語学として無視しえない新たな言語コミュニティを論ずることになるだろう。

“Connective Functions and the Functional Development of a Concessive Discourse Marker *Still*”

Erina Iwai

(Aoyama Gakuin University (graduate student))

As a concessive discourse marker (DM), *still* has two distinguishing properties: it accepts the truth or validity of the prior discourse segment, and it signals the speaker's communicative intent to contrast an aspect of information derived from the prior discourse (cf. [1]). This study takes a corpus-based approach to the DM *still* and firstly examines synchronically its connective functions in terms of a range of verbal communication (e.g. propositional content, conversational implicature, illocutionary force, and conversational conventions such as topic change). The study then proceeds to a diachronic analysis to reveal and discuss how the connective functions have developed over the last few centuries, with due considerations given to “pragmatic strengthening” [2] and “pragmaticalization” [3].

[1] Bell, David M. (2010) “*Nevertheless, Still and Yet*” [2] Traugott, Elizabeth C. (1988) “Pragmatic Strengthening and Grammaticalization” [3] Onodera, Noriko O. (2004) *Japanese Discourse Markers*.

第五室 (11月12日午後)

司会 澤田治 (三重大学)

「状況意味論に基づく量化副詞の分析に対する新たな証拠」

水谷謙太 (大阪大学大学院)

量化副詞が量化する対象に関して論争が続いており、非選択束縛を用いた分析 (e.g. Kratzer 1995 [1]) と状況意味論を用いた分析 (e.g. von Stechow 1994 [2]) の2つが提案されている。本発表では、量化副詞と個体レベル述語の比較級を含む文の容認性がthan節内で用いられるDPに応じて変化するという新たな観察をもとに、2つの分析を比較する (*John is always taller than Tom / John is always taller than every basketball player)。非選択束縛に基づく分析では、この容認性の違いを捉える際に2種類の比較を表す形態素、限定詞の存在を仮定しなければならず説明的でないという問題がある。一方、状況意味論に基づく分析では、everyが持つ状況代名詞 (Schwarz 2012 [3]) と量化副詞の相互作用によって自明な真理条件が回避されると考えることで、この容認性の違いを捉えることができる。以上の事実を踏まえ、状況意味論に基づく分析のほうが経験的に優れていることを主張する。

[1] “Stage-level and Individual-level Predicates,” in *The Generic Book*. [2] *Restrictions on Quantifier Domains*, PhD diss, UMass. [3] “Situation Pronouns in Determiner Phrases,” *NLS* 20.

「イベント項の存在論、および、英語と日本語の関連構文について」

井川壽子 (津田塾大学)

Krifka (1990[1])の挙げた次の例文、4000 ships passed through the lock last year.の解釈には、4000隻の別々の船(個体)の開門通過という意味のほか、たとえ1隻であれ4000回の開門通過がみられたという意味がある。後者の解釈では、数詞4000は個体ではなくイベントの数を数えている。(cf. Maienborn 2011)。

本発表では、日英語の諸構文を観察し、イベント項を述語の潜在項のひとつと捉えるイベント論理学(cf. Davidson 1967[2])の動機づけ、および、その展開の可能性を提示する。There構文、知覚構文ではイベント項の存在量化の観点

から論じ、same/differentの構文ではイベント照応の観点から論じる。日本語の知覚構文、遊離数量詞構文、「お互い」構文等の観察を通して英語とは異なる意味の様相について考察する。[1] “Four Thousand Ships Passed through the Lock,” *L & P* 13. [2] “The Logical Form of Action Sentences,” *The Logic of Decision and Action*, U of Pittsburgh P.

「英語の未来表現と「予測」のモダリティ・「断定」のモダリティ」

和田尚明 (筑波大学)

本発表では、筆者の理論 (Wada (2001[1])) においては未来表現の時制解釈に不可欠な、「予測」と「断定」という心的態度としてのモダリティの体系的な位置づけとその正当化を行う。状況把握には認知主体 (話者) の観点から反映する立場では命題内容に対する話者の心的態度 (対事話者態度) が必ず伴うので、「予測」と「断定」は対事話者態度を表す認知的モダリティとして位置づけられる。The parcel {will arrive/arrives} tomorrow. の場合、will 文は「予測」、現在形文は「断定」でもって話者は状況判断している。この種のモダリティは通例当該話者に帰する主観的解釈を受けるが、状況報告の際に別の観点との対比が問題となる場合、一定の環境においては、法表現を含まない形式に伴う「断定」は客観的解釈が可能となる。そのメカニズムを廣瀬の「公的表現・私的表現」に関する理論 (廣瀬 (1997[2]) など) を用いて明らかにすることで、「予測」と「断定」を心的態度としてのモダリティとする分析の正当化を図る。

[1] *Interpreting English Tenses*, Kaitakusha. [2] 「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』研究社。

第六室 (11月12日午後)

司会 柴崎礼士郎 (明治大学)

「tough節の範疇についての一考察: 共時的視点と通時的視点から」

中川直志 (中京大学)

本発表においては、tough構文における不定詞節(tough節)がその歴史的発達過程で統語範疇を拡大させたものの、それは弱フェイズとしてのvPまでであったとする主張を共時的側面と通時的側面から展開する。

現代英語のtough節においては、一般に、be受動構文が現れることができないとされるが、get/become受動構文になると容認性が向上する。また、現代英語では許されないtough節におけるbe受動構文が、15世紀前後を中心に可能であったという観察がある(Fischer (1991)[1])。これらは、受動構文におけるbeの文法化(保坂(2014)[2])を踏まえることにより、本発表の主張と符合する。

さらに、インターネットなどで散見される「be受動構文を容認するtough節」がそれを容認しないtough節と範疇を異にすることを示す(Maruta (2012)[3])と共に、この分析が、tough節における小節の生起可能性に対する分析と共に、本発表の主張に沿うことを示す。

[1] Fischer (1991) “The Rise of the Passive Infinitive in English.” [2] 保坂(2014)『文法化する英語』。 [3] Maruta (2012) “On passivized tough-infinitives.”

「古英詩Andreasに見られる節頭のnu」

石黒太郎 (明治大学)

古英語にはそれが節の最初に現れると、副詞と接続詞が同綴であるためにどちらの品詞として解釈すべきか判断の難しい語がいくつかある。そのような語として代表的な、場所を表すþær、時を表すþaと同じく、本来は時を表すnuにも判別の困難な用例が散文、韻文を通じて少なくない。今回取り上げる古英詩 *Andreas* はKrapp (1932[1])以降でもこれまで 4つの校訂本が出ている。本発表ではBlockley (2001[2])などの先行研究を参考にして、これらの校訂者の判断を参照しながら、*Andreas*の用例を材料としてnuのもつさまざまな働きを考察する。伝統的な文法ではとらえにくい、統語的には独立した節が緩やかに繋がっていく、古英語韻文の文法的一端を、一つの作品に見られる用例から提示を試みる。

[1] Anglo-Saxon Poetic Records 2 [2] “Subordinate Clauses without *απο κοινου* in Old English Verse, Chiefly in *Beowulf* and Chiefly *nu* and *swa*”

「EPP 再考—主語は普遍か」

大沢ふよう (法政大学)

主語が義務的であるとするEPPは広く議論されているが主語が必要な理由はいまいで、現代英語に見られる顕在的主語の義務性がそのまま原理とされている。最近ではnull argumentsはChomsky (2005[1])で提唱されたthird factor principlesからnaturallyに出てくるとしてNull Subject Parameterを否定するSigurðsson (2011[2])、Gelderen (2013)の分析もある。PDEにおけるEPPの存在は虚辞が義務的に存在することで経験的に支持される(Chomsky (2008))が、EPPは普遍文法から除かれるべきという主張もある(Grohmann et al.(2000), Bever (2009))。GBとは違いMinimalistでは主格と主語が切り離され、移動の理由が格によらないIcelandicもあり何故顕在的な移動が必要なか明確ではない。移動は全て解釈不可能な素性の消去を理由とするという提案もあるが「人間言語はある種の最適性optimalityを備えている」というMinimalistの中心的仮説からするとこの解釈不可能な格の存在はどのように説明されるのか(Chomsky(2005[2]))。本発表では歴史を遡り主語が普遍的存在としてどの時代のどの言語にも存在するものではなく義務的統語的主語は格体系の変化と機能範疇の出現によりもたらされたと提案し、Sanskritなど古典語に言及して妥当性を検討する。

[1] “Three Factors in Language Design” *LI* 36.1:1-22. [2] “Conditions on Argument Drop” *LI* 42.2:267-304.

第七室 (11月13日午前)

司会 中尾千鶴 (大東文化大学)

「*Ancrene Wisse*における本動詞と目的語の相対的語順と借入語」

宮下治政 (鶴見大学)

時崎久夫 (札幌大学)

線形順序は音韻部門にて決定されるというミニマリスト・プログラムの考えのもと、Tokizaki (2011[1])は、ある言語における主要部と補部の相対的語順は語強勢の位置によって決定されるという分析を通言語的事実に基づいて提示している。本発表では、初期中英語の西ミッドランド方言で書かれた*Ancrene Wisse* (AW) 中で観察される本動詞 (V) と目的語 (O) の相対的語順もTokizakiの分析を支持することを論証する。この分析は、語頭指向強勢の言語(ゲルマン諸語等)はOV語順を示すのに対し、語末指向強勢の言語(ロマンス諸語等)はVO語順を示すという傾向を正確に捉えている。AWにおいても、多少の例外はあるが、Oが古英語由来語の場合はOV語順を示す一方で、Oが古フランス語借入語の場合はVO語順を示すという興味深い事実が電子コーパス (Kroch & Taylor (2000[2])) を利用した調査から得られる。

[1] “The Nature of Linear Information in the Morphosyntax-PF Interface,” *EL* 28.2. [2] PPCME2.

「フェイズ理論とカートグラフィの融合」

大塚知昇 (九州共立大学)

生成文法の現在主流の研究方針として、MI ([1])に始まり、派生の単位であるフェイズに基づき、言語現象に演繹的、派生的にアプローチするフェイズ理論と、Rizzi (1997 [2])に代表される、言語の左周辺部の構造を探求し、帰納的、表示的アプローチをとるカートグラフィ研究があげられる。両者の融合は理論研究を発展させる上で望ましいものであるが、両アプローチの違いがこれを妨げてきた。本発表は、POP+ ([3])の立場からカートグラフィ研究を捉え直し、両研究の融合の可能性を模索するものである。

まずフェイズ主要部Cとそれが持つ役割をForceとFinに分離、分業し、両者の相互作用により左周辺部が形成されると提案する。またPOP+の自由併合(Free Merger)の想定のもと、両主要部を派生に導入する際に生じる複数の可能性から、POP+が論じたCを消去した節構造や、欠如的な不定詞節の構造等が捉えられると主張し、議論を経験的に補強する。

[1] Chomsky (2000) “Minimalist Inquiries.” [2] “The Fine Structure of the Left Periphery.” [3] Chomsky (2015) “Problems of Projection: Extensions.”

司会 島田雅晴 (筑波大学)

“Phonological Significance of Bare Phrase Structure Labels for Linearization”

Takashi Toyoshima
(Kyushu Institute of Technology)

In this presentation, I will develop a graph-theoretical approach for linearization [1], and argue contra [2], that projection labels are still phonologically significant for linearization of Chomsky’s (1995) original Bare Phrase Structure, whose maximal projections are labeled with their terminal heads without any projection levels or categories as in the X’-theory. First, I point out two major problems, one empirical and the other theoretical, of tree traversal procedures applied to X’-structures in [1]. Then, I propose their modifications, by adopting the hypothesis that heads move to a specifier position (along the line of my previous works and [3], among others), and show how they can be applied to Bare Phrase Structure. Finally, I claim that this is a more promising approach for linearization than the ones based on the Linear Correspondence Axiom of Kayne (1994) that is widely adopted.

[1] Kural 2005 “Tree Traversal and Word Order,” *LI* 36. [2] Tokizaki 2005 “Prosody and Phrase Structure without Labels,” *EL* 22. [3] Matushansky 2006 “Head-Movement in Linguistic Theory,” *LI* 37.

「VOS言語からみた態と語順と文処理負荷：統語理論と文解析理論への貢献」

小泉政利 (東北大学)

セデック語タロコ方言 (オーストロネシア語族, 台湾) の文処理負荷を, 文正誤判断課題を用いた聴解実験で調べた。刺激文として, Agent Voice (AV) と Goal Voice (GV) の2つの態それぞれにつき, VOSとSVOの2種類の語順の文を用意し, 2x2の4条件で実験を行った。その結果,

態と語順の主効果が有意であった。すなわち, GVのほうがAVよりも, またVOSのほうがSVOよりも反応時間が短かった。交互作用は有意ではなかった。この結果は, 「セディック語ではvPの指定部が左側にあり, TPが義務的に前置される」とする Aldridge (2014 [1]) による統語分析と, 「移動の処理負荷は埋語と空所の間線的に介在する要素の数に比例する」とする Gibson (2000 [2]) の Dependency Locality Theory との組み合わせによる予測と一致する。また, 「主語が目的語に先行する主語・目的語語順のほうがその逆の目的語・主語語順よりも好まれる」という一般化が, どの言語にも当てはまる普遍的なものではないことを示している。

[1] “Predicate, subject, and cleft in Austronesian languages” *Sophia Linguistica* 61: 97-121.

[2] “Dependency locality theory” in Marantz et al. (eds.) *Image, Language, Brain*, MIT Press.

第八室 (11月13日午前)

司会 島田雅晴 (筑波大学)

「英語の二重目的語構文における受動化と格付与メカニズムの通時的変化」

柳朋宏 (中部大学)

本発表では英語の二重目的語構文における受動化と格付与メカニズムの通時的変化について, 生成文法に基づいて論じる。古英語の二重目的語構文では, 2つの目的語のうち, 直接目的語が主格主語となる受動文 (直接受動文) は可能であったが, 現代英語とは異なり間接目的語が主格主語となる受動文 (間接受動文) は観察されていない (Mitchell (1985: §839))。しかしながら, 中英語では間接受動文が用いられるようになり, 一時期には直接受動文と共存することになる。さらに前置詞句を伴う直接受動文の事例も観察される。しかしその後, 標準英語の二重目的語構文では間接受動文のみが可能となり, 前置詞と格構文に対しては前置詞を伴う直接受動文が用いられるようになる。このような二重目的語構文における受動化の通時的変化は二重目的語動詞の格付与メカニズムの

変化と内在格の具現化の違いによって生じた
と主張する。

Chomsky, N. (2001) “Derivation by Phase” /
Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*. /
Woolford, E. (2006) “Lexical Case, Inherent Case, and
Argument Structure,” *LI* 37

“PP-Fronting in Postnominal Participial Phrases in the History of English”

Bai Chigchi

(Nagoya University (graduate student))

This paper reports a hitherto unnoticed fact that
a postnominal participial phrase could have the
participle preceded by a prepositional phrase (PP)
until the 18th century in the history of English and
shows that PP-fronting was a device for driving a
defocused element (PP, here) out of end position,
thereby allowing a focused element (participle, here)
to occupy the position. This is supported by a
number of previous observations on the interaction
between word order and information structure in the
history of English (Bech (2001[1])). It is argued
that the landing site of fronted PPs is the specifier of
Topic Phrase in the left periphery of vP, along the
lines of analyses suggesting the structural
parallelism between the CP and vP domains
(Jayaseelan (2001[2])).

[1] *Word Order Patterns in Old and Middle
English: A Syntactic and Pragmatic Study* [2]
“IP-internal Topic and Focus Phrases”.

司会 中尾千鶴 (大東文化大学)

「英語史における目的語移動と左周縁部」

田中智之 (名古屋大学)

英語史においてOVからVOへの語順変化が
あったことはよく知られているが、それに関する
幾つかの文献において、目的語がTPからVP
にかけての節の中間領域に移動することが可能
であったと主張されている。本発表では、助
動詞を含む定形節における目的語と副詞の相
対語順について歴史コーパスを用いた調査を
行い、Rizzi (1997[1])等で提案されている機能範
疇の階層構造がvPの左周縁部に存在すると仮
定することにより、古英語における目的語移動

の分布が正しく説明されることを提案する。そ
の後、目的語移動は中英語以降に消失するが、
その要因としてOV基底語順の消失(Pintzuk and
Taylor (2006[2]))と他動詞虚辞構文の衰退
(Tanaka (2000[3]))を指摘し、vP領域の構造変化、
特に機能範疇TopとFocの消失と関連付けて目
的語移動の消失を説明する。したがって、本発
表は機能範疇の普遍性を否定する立場から、少
なくともvP領域の構造が通時的に変化する可
能性を示唆する。

[1] “The Fine Structure of the Left Periphery” [2]
“The Loss of OV Order in the History of English”
[3] “On the Development of Transitive Expletive
Constructions in the History of English” *Lingua*
110.

「素性継承システムのパラメータ化と英 語史における統語システムの段階的変化」

三上傑 (東北大学)

本発表は、Miyagawa (2010[1])で提案された
素性継承システムのパラメータ化の枠組みを
採用し、英語における統語システムの通時的変
化を捉えることを目的とする。具体的には、後
期中英語期に消失したV2現象と初期近代英語
期まで保持されていたV-to-T移動を取り上げ
る。そして、英語の統語システムは後期中英語
期から初期近代英語期を通して、焦点卓越型
から主語卓越型に段階的に変化を起こし、その
パラメータ変化の過渡期には、両言語タイプ
の特性が組み合わさった「ハイブリッド型」
の統語システムを有していたと主張する。本
分析により、先に挙げた一連の通時的変化を、
それぞれの消失時期が異なるにもかかわらず、
同一パラメータの値の変化により引き起こさ
れたものとして統一的に捉えることが可能に
なる。また、英語における他動詞虚辞構文
(Transitive Expletive Construction)の認可
と衰退に関する事実 (cf. Tanaka (2000[2]))
に対しても、原理的な説明が与えられること
を示す。

[1] *Why Agree? Why Move?*, MIT Press. [2] “On
the Development of the Transitive Expletive
Constructions in the History of English,” *Lingua*
110.

第九室 (11月13日午前)

司会 本間伸輔 (新潟大学)

「Where節と「ところ」節—「水平性」と「垂直性」の交錯—

坪本篤朗 (静岡県立大学)

本発表では、本来「場所(=空間)」を表すwhere節および「ところ」節が「非場所」的—特に、「時間」に関係する—に用いられる場合をとりあげ、その意味的・構文的性質を明らかにすると同時に、それらに通底する原理を考究する。

ここで取り上げるwhere節は、(1) a. The police caught the thief **where** he was running away. b. When I think of my dad, I always remember him **where** he was working on some project in the garage...のような例で、一定のコンテキストで用いられる。下線部連鎖にはV “NP as S”, V “NP V-ing”などにも共通する叙述関係が成立している。「ところ」節については、[1]の「伴トコロ名詞句」([NP [S-トコロ]]_{NP})と上記where節の場合の関係を、水平軸における「連続性」と垂直軸における「限定性」との交差における両義性から接近し、日英語比較を念頭におきながら、それぞれの構文の多様な構文的振る舞いを統一的に捉えたい。

[1] 黒田成幸.1999.「トコロ節」『ことばの核と周縁』

司会 柴崎礼士郎 (明治大学)

“An Integrative Analysis of the *just because-X-not-Y* Construction in English”

Hiroshi Takahashi (Showa University)

Hywel Evans (Tsuru University)

Masaki Ohno (Showa University)

The construction that Bender and Kathol (2001[1]) call the *just because-X-not-Y* construction, abbreviated as *JB-X-not-Y* construction, a subtype of more general constructions collectively dubbed inference denial constructions, exhibits highly idiosyncratic behaviors concerning the scope interaction between its inferential *because* clause and negation. In this talk, we will show that the felicity of the *JB-X-not-Y* construction is largely determined pragmatically and that purely syntactic

accounts of the negative scope are inadequate for the construction, contrary to the ordinary causal *because* clause cases. We will argue that it is necessary to integrate a broad range of language-related domains, such as lexical semantics, pragmatics, and our encyclopedic knowledge, as well as syntax, in order to give a full account of the idiosyncratic properties of the *JB-X-not-Y* construction.

[1] “Constructional Effects of *Just Because...Doesn't Mean...*,” *BLS* 27. 13-25.

「構文による指示の抑圧」

朝賀俊彦 (福島大学)

本発表では、Det N1 of an N2 の形式を持つ an angel of a girlのような名詞句の内部にみられるN1の意味的従属化を、構文において指示指標が抑圧されることの帰結として説明する分析を提案する。このタイプの表現がJackendoff (1990[1])等のいわゆる構文イディオムであるとの分析によれば、当該の表現は句レベルの語彙項目であり、その中に生起するN1は、語形成により語彙項目の内部に取り込まれた名詞としてその指示性を欠く。決定詞とその名詞補部との間の選択関係を指示性の継承に基づいてとらえる(Baker (2003[2]))ならば、問題の意味的従属化は、指示性を欠くために、N1がDetの補部としての資格を失うことの結果としてとらえられる。発表では、さらに、Bakerによる語彙範疇の分析を踏まえ、N1が名詞とは異なる特性を示すことを説明するとともに、関連表現における指示の抑圧について考察する。

[1] *Semantic Structures* [2] *Lexical Categories*

第十室 (11月13日午前)

司会 都築雅子 (中京大学)

“Root PathPP Small Clauses in English: Developmental Origins of Path-Related Constructions”

Takeru Suzuki (Tokyo Gakugei University)

I discuss data of acquisition (mainly Tomasello 1992) which show that bounded Path particles/Ps (PthPrt/P; Koopman 2010, Noonan 2010) such as *up/down/on/off/out* are predicates of change of

location and constitute a root small clause at early stages (Progovac 2006). Tomasello's data further reveal the later appearance of *put* with PthPrt/PP, which indicates its light verb nature from the earliest stages on. Assuming the seamless development from pre-sentential to later stages, I claim that root PthPrt/PP small clauses (PthSC) are the developmental precursors of light-verb-PthSC constructions (Hampe 2013). I examine implications of the early acquisition of PthPrt/PP predicates for adult grammar, arguing that it derives lexical subordination (Levin&Rapoport 1988) and satellite-framing of Path in English (Talmy 1985). I consider more properties which I suggest are motivated by satellite-/verb-framing of Path, and also speculate on related V-PthPrt/PP constructions.

「<場所>の具現化とEmpty P仮説について」

並木翔太郎 (筑波大学大学院)
山田祥一 (北海道教育大学)

Kaga (2007[1]) は、意味役割の理論における<場所>の具現化に関して、影響を受けなく<場所>は前置詞句として、影響を受ける<場所>は名詞句として具現するという原理を提案した。しかし、従来の分析では、enterやapproach等の動詞は場所名詞句を目的語に取るとされ、この原理に違反することになる。これに対し、Kaga (2007:69) は、当該動詞は非対格構造を持ち、当該動詞に後続する要素が音形を持たない空の前置詞を主要部とする前置詞句であると仮定した (empty P仮説)。本発表は、このempty P仮説を共時的・通時的観点から検証する。具体的には、副詞rightの挿入とそれによる前置詞の具現化、場所句倒置構文における前置詞の具現化 (Hoekstra and Mulder (1990))、中英語期におけるbe完了形の存在など、様々な経験的事実からこの仮定の妥当性を示す。

[1] *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*

司会 森田順也 (金城学院大学)

「日本語の名詞修飾要素の形態、意味と統語的位置に関する一考察」

森田千草 (目白大学)

日本語における名詞修飾要素の内部構造に関するひとつの提案を行い、その意味と形態、統語的振る舞いの関係を考察する。日本語の名詞修飾要素は形態的に数種類に分類されるが、Morita (2012[1]) は、Kennedy and McNally (2005[2])の段階性スケールの分類を用い、ある形態的特性を持つ名詞修飾要素が、特定の段階性スケールを持つ傾向があることを提示した。この考察を基に、形容詞は本質的に完全に開放されたスケールを持つ語彙範疇であるのに対し、名詞はスケールを閉鎖する機能がある語彙範疇であり、名詞修飾要素の段階性スケールの種類は語彙範疇を決定する機能範疇主要部によって決定することを提案する。また、名詞修飾要素の内部構造を提示したうえで、それぞれのタイプの統語的位置について再考察し、スケールが閉鎖した修飾要素ほど主要部名詞に構造的に近い位置に生じ、開放スケールを持つ要素は名詞から離れた位置に生起することを提案する。

[1] "The Morphology and Interpretations of Gradable Adjectives in Japanese," *EL 30*, 243-268.

[2] "Scale Structure and the Semantic Typology of Gradable Predicates," *Language 81*, 345-381.

「名詞を前位修飾する現在分詞の範疇と派生に関する一考察」

杉浦克哉 (秋田工業高等専門学校)

英語の現在分詞はthe crying boy, an amusing story, an understanding friend, a fitting remark, the shining sunのように名詞を前位修飾する。名詞を前位修飾する現在分詞の先行研究はそのほとんどが記述的な説明にとどまり、Meltzer (2010[1])を除き理論的な説明はほとんどない。Meltzerは英語とヘブライ語の現在分詞の振る舞いに基づき形容詞の現在分詞は語彙部門で形成されると仮定し、英語の形容詞の現在分詞の派生を説明している。本発表ではそれらは統語部門で形成されるとする立場を採用しChomsky (1995[2])の生成文法理論の枠組みを用い、形容詞として振る舞う現在分詞の派生を説明することを試みる。また歴史コーパスから得た資料に基づき心理動詞を基体を持つ現在分詞による名詞前位修飾構造の史的発達につ

いても論じる。

[1] “Present Participles: Categorical Classification and Derivation,” *Lingua* 120. [2] *The Minimalist Program*, MIT Press.

第十一室 (11月13日午前)

司会 吉田悦子 (三重大学)

「GCIに基づく『そして』の談話内での機能の考察と文頭のAndとの対照」

海寶康臣 (立命館大学)

本発表では、Levinson (2000[1])で提案されているGCIに基づいて、接続詞「そして」の談話内での機能を、文頭で使用されるAndと対照しながら考察する。本発表の主張は次の(A)-(D)である。(A)文や語句が列挙されている談話において、「そして」を耳にした聞き手は、後続部分に列挙の最終項目が生起するという予測をするが、この予測が可能なのは、「そして」の直後までに列挙されている項目以外に、追加項目はない、というQ推意が生じるためである。(B)「そして」により接続されている文は、聞き手に「そして」の直後に生起する指示物や命題に話題や場面が変わることをM推意させる場合がある。(C)「そして」は後続部分に聞き手の注意を向けさせるが、これは「そして」により接続されている項目以外には追加項目はないというQ推意の効果である。(D)「S1 そしてS2」は、Q推意もしくはM推意を生じさせることができない場合、容認不可能になる。

[1] Levinson, S. (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, MA: MIT Press.

「関連性理論による重複型表現へのアプローチ」

時政須美子 (奈良女子大学大学院)

英語のインフォーマルな口語において、基体となる表現Xを重複させた表現 (以下、XX構文) がある。例えば、What I wanted was a DOG dog. という表現において、名詞dogの繰り返しであるdog dogがXX構文である。これまでのネオグライス派の立場からの研究では、Horn (1993, 2006[1])は、XX構文の4つの用法を説明

しており、上掲のdog dogは、そのうちの「犬らしい犬」を表すprototypeの用法としている。本発表では、Hornやこれに続くHuang(2009[2])のネオグライス派の説明の問題点を指摘した上で、関連性理論の立場から、「XX構文は、アドホック概念の構築過程においてnarrowingで解釈せよという手続き的意味を持つ。」と仮定し、XX構文の統一的な説明が可能であることを具体的な例を用いて示す。

[1] “Speaker and Hearer in Neo-Gricean Pragmatics” [2] “Neo-Gricean Pragmatics and the Lexicon”

司会 吉田悦子 (三重大学)

「多読教材用英語絵本における登場人物と読者の関係：文科省検定教科書との比較」

大槻きょう子 (奈良県立大学)

言語教育の分野で多読学習の成果が多数報告されているが、学力伸長をもたらした多読教材のテキストを分析した研究は少ない。本発表では、多読教材として人気のOxford Reading Treeと文科省検定英語教科書における指示表現を比較し、(1)登場人物と読者との関わり、特にテキストの発話部分で読者がどのような立場で扱われるのか (2)発話者の伝える情報の選び方、提示の仕方はテキスト間でどのように違うか、の二点を分析し、言語習得への影響を考察する。Bell (1984[1])の設定した5種類の会話参加者 (speaker, addressee, auditor, overhearer, eavesdropper) という概念と、コミュニケーション参加者間の知識の共有の観点から両テキストの直示表現の用法を分析する。それぞれのテキストで、読み手は上記5種類の異なるカテゴリーに分類されることを報告する。このテキスト上のコミュニケーションにおける登場人物と読み手の関係が言語習得に及ぼす影響にも言及する。

[1] Bell, Allan (1984) “Language Style as Audience Design,” *Language and Society* 13, 145-204.

“Vicarious Announcement for Epistemic Disclosure in a BELF Interaction”

Keiko Tsuchiya (Tokai University)

This preliminary study investigates discursive practices of *epistemic disclosure* in a BELF (Business English as a Lingua Franca) interactional talk at casual office lunch in Singapore. I shall introduce the concept of *vicarious announcement* is introduced, adapting from *vicarious narrative* [1]. Three research questions are addressed: (1) how do the participants allocate their speaking time among them?, (2) what topics do they discuss?, and (3) who discloses his/her knowledge of whom, and in what way? The results show that several shared social events were discussed in the meeting, which were initiated by some leading participants' vicarious announcements. They announced others' experiences to select a next speaker, prompting his/her narratives, and at the same time, to disclose the speakers' epistemic status of the others.

[1] Norrick, N., R. (2013). Narratives of vicarious experience in conversation. *Language in Society*, 42(4), 385-406.

第十二室 (11月13日午前)

司会 山本武史 (近畿大学)

「部分的抜き出しと循環的線形化」

小池晃次 (名古屋大学大学院)

受動分詞や非対格動詞の主語からはwh移動による部分的抜き出しが可能である一方で、他動詞や非能格動詞の主語からはwh移動による部分的抜き出しが不可能であることがChomsky (2008 [1])を含めた幾つかの文献において観察されてきた。本発表では、この対比をFox and Pesetsky (2005 [2])によって提案された循環的線形化のシステムから演繹することを試みる。具体的には、内項からのwh移動による部分的抜き出しは順序矛盾を生じず適切に線形化できるため文法的である一方で、外項からのwh移動による部分的抜き出しは順序矛盾を生じ適切に線形化できないため非文法的であると主張する。さらに、同様の説明が外置による部分的抜き出しについても成り立つことを論じる。こうして、部分的抜き出しの可否は、その抜き出しの方向性に関係なく、循環的線形化の下で統一的に説明されることを示す。

[1] "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. [2] "Cyclic Linearization of Syntactic Structure," *Theoretical Linguistics* 31, 1-45.

司会 堀田優子 (金沢大学)

「隠れた Epistemic Modality」

蒲地賢一郎 (志學館大学)

von Fintel and Gillies (2010)は、(1) [Seeing the pouring rain]という状況において、文 a. It's raining. は容認可能だが、b. ??It must be raining. は不自然な文としている。話し手の indirect inference (間接的推論) というものが容認性に関わっているとしている。さらに、(2) [Seeing wet rain gear and knowing rain is the only possible cause] という状況においては、次の両文とも容認可能としている。a. It's raining. b. It must be raining. Must を含む b. の文には indirect inference (間接的推論) が関わっているとしている。しかし、文の(非)容認性に「直接」影響を及ぼしているのは must の有無ではなく状況(コンテキスト)の相違ではないのか。must を含む(2b)と同じ状況で(2a)が使用されるというのなら、must を含んでいない(2a)もモダリティ表現の一つと呼ぶべきではないだろうか。(2a)のような表現を「隠れた epistemic modality」を含む文としたい。von Fintel and Gillies. 2010. "Must...stay...strong!" *Natural Language Semantics* 18. pp.351-383.

「認知文法から見た人称概念」

古賀恵介 (福岡大学)

人称とは、一般には、代名詞の対象指示における話し手・聞き手・それ以外の区別を表す概念として捉えられている。それは、英語を初めとする欧州諸語では、代名詞以外では、人称の区別がほとんど問題とならないからである。しかし、鈴木(1973[1])や田窪(1997[2])の詳細な分析にあるように、日本語では、1人称・2人称が必ずしも代名詞に固定されず、固有名詞や役割名詞 (e.g. 先生、課長) にも転移して用いられる。本発表では、この人称転移の現象を手掛かりとして、代名詞と通常

名詞の意味構造の違い、人称代名詞カテゴリーの確立度、動詞の人称変化の存在意義といった問題を、認知文法における Grounding の概念を用いて考察していく。また、その際、英語における例外的人称転移現象や他言語での人称転移の状況などにも触れる予定である。[1]『ことばと文化』岩波書店。[2]「日本語の人称表現」『視点と言語行動』くろしお出版。

〈シンポジウム〉

A 室 (11 月 12 日午後)

「現代メディアの談話分析：災害をどう伝えるか」

司会 佐藤彰 (大阪大学)

近年日本では数々の災害が発生し、それらに関する報道が多くなされている。しかしその報道は「流しっぱなし」であることが多く、また検証が行われたとしても、社会学やジャーナリズムの視点にはほぼ限られる。

本シンポジウムでは、「災害をどう伝えるか」という問いについて、メディアとことばという視点から日本語／英語のメディア・コミュニケーションを調査・分析し考察する。各発表は、東日本大震災や原子力発電所事故などに関するコミュニケーションについて、新聞やテレビ、動画共有サービスなどから得られるデータを、社会言語学的分析、ナラティブ分析、相互行為分析、マルチモード分析といった談話分析の手法を用い、「メディアが構成する現実とは何か」という問いに答えようとする。これらを通し、関連分野への貢献とともに、災害問題に関する人文学・社会科学の構築への寄与を志す。さらには、その研究から得られた知見を社会に還元することを目指す。

「災害報道の社会言語学的分析：英米メディアが見た東日本大震災」

講師 佐藤彰 (大阪大学)

本発表では、英米での東日本大震災に関する新聞報道を日本でのそれと比較することで、それぞれのメディアがどのような現実を構成しているかを明らかにする。具体的には、Jäger

(2001[1])を参考に、用いられる語彙や比喻などが社会的コンテクストによりどう異なるか、またストーリーがどのように組み立てられているかなどに着目する。

例えば、日本のメディアと異なり、海外メディアは震災発生時の福島第一原子力発電所における事故対応を戦闘にたとえ (*reactor battle*)、また現地で作業にあたった人々 (*the nuclear power industry's equivalent of frontline soldiers*) を *Fukushima 50* と呼び戦争ヒーローのように扱った (そしてそのような海外の反応自体が国内ニュースになった)。これらの分析を通し、その背後にある態度・規範・価値観の違いなどをあらわにしたい。

[1] “Discourse and knowledge: Theoretical and methodological aspects of a critical discourse and dispositive analysis,” in R. Wodak & M. Meyer (eds.), *Methods of Critical Discourse Analysis* (1st ed.), 32-63. SAGE.

『記憶』としての震災：日英マス・メディアによる再文脈化の対照研究

講師 秦かおり (大阪大学)

本発表は、メディアメッセージは「そこに在る事象」が脱文脈化され、文化的社会的に再文脈化されて生産される (Lee and Thomas 2012[1]) という前提のもと、日英のマス・メディアが過去の出来事を振り返った時に何を前景化させ、何を後景化させて「記憶」を再構築していくかを分析する。

2011年3月11日に発生した東日本大震災及びその後の原発事故は世界中の関心を呼び、発生時にニュースとして取り上げられたことはもちろん、その後1ヶ月、3ヶ月、1年、5年と、区切りごとにドキュメンタリー番組が制作された。本発表では、日本のNHKや民放各局、英国のBBCや民放各局が制作したこれらのドキュメンタリー番組を取り上げ、そこに生起する／しない言語・非言語資源を分析する。特に「子供」を巡るナラティブの構築に焦点を当て、子供を中心とする単位 (家族、地域、より曖昧な「国民」) についての言説の広がりの中での「前・後景化」を軸に分析することを試みる。

[1] *Public Memory, Public Media, and the Politics of Justice*, Palgrave Macmillan.

『思い出す』という行為：国会事故調査委員会における記憶の検証

講師 古川敏明 (大妻女子大学)

2011年の東日本大震災後、東京電力福島原子力発電所で発生した事故の原因究明を目的とし、国会による事故調査委員会が組織された。委員会の映像はインターネットで配信され、合計約80万人が視聴したとされる。現在、これらの資料は国立国会図書館のウェブサイトに保存されているが、委員会で実際にどのようなやりとりが行われたのか詳細な検証はされていない。発表者は調査委員と参考人が相互行為中で記憶を(再)構築するやりとりを分析する。具体的には、心理学的対象に着目した相互行為分析を行う談話心理学の手法を採用し(Lynch and Bogen 2005[1])、政府・電力会社・規制官庁の関係者が参考人として出席した15回分の委員会における記憶の検証行為について論じる。予備的な分析の結果、委員からは「記憶にございますか」という明示的な質問や議事録中の過去の発言への言及がされ、参考人からは利害関係を予防する応答が見られた。

[1] “My Memory Has Been Shredded’: A Non-cognitivist Investigation of ‘Mental’ Phenomena” in H. te Molder and J. Potter (eds.) *Conversation and Cognition*, CUP.

「震災報道を通して伝えられる日本：『冷静』で『秩序を守る』日本人」

講師 岡本能里子 (東京国際大学)

東日本大震災の報道において、欧米やアジアの親日国のメディアは、津波や原発事故を捉えた衝撃映像に加え、支援物資を受け取る被災地の人々やバスを静かに待つ東京の人々の整然と並ぶ姿の写真を多く取り上げた。通常日本への批判報道が多い中韓のメディアでさえ類似の写真を掲載し、更に中国のオンライン上のメッセージは、こうした日本人のマナーの良さは「日中の国内総生産の規模が逆転したからと言って得られるものではない」と賞賛した。

本発表では、「メディアは現実を再構成し、提示する」というメディアリテラシーの基本概念に基づき、各国のメディアが動画や写真を含むマルチモードの表現素(Cope & Kalantzis

1991[1])を駆使して発信した震災報道を比較分析し、それらが、「冷静」で「秩序を守る」日本人の姿を戦後奇跡の復興を遂げた日本の「記憶」と重ね合わせ、脱文脈化と再文脈化を通して各国民へのメッセージへと再構築する過程を明らかにする。

[1] *Multiliteracies: Literacy Learning and the Design of Social Future*, Routledge.

B室 (11月12日午後)

「自然談話における思考動詞の使用について」

講師 遠藤智子 (筑波大学 (非常勤))

人とのやりとりにおいて、自分の思うことや思ったことを述べるのはごくありふれた行為である。しかし、“think”や“思う”等の動詞を用いて明示的に自己の思考活動について言及することは、思う・思った内容を伝えるのとは別のレベルの行為である。思考動詞は言語によって使われ方が異なり、相互行為の中で様々な機能を担いるのである。本シンポジウムでは、思考動詞が会話やナラティブ等の話し言葉においてどのように用いられるのかを Santa Barbara Corpus of Spoken American Englishや Corpus of Contemporary American English、Michigan Corpus of Academic Spoken English、ミスターオーコーパス等の英語自然談話データや、日本語および中国語の会話データを基に検討する。日本語の“思う”の機能と音響的特徴(甲田)や、日英語の思考動詞の出現位置と機能の違い(野村)、中国語と英語における思考動詞の内容節の性質の違い(遠藤)、および*think*の位置による機能の違い(佐藤)を論じる。

「日本語会話における思考動詞」

講師 甲田直美 (東北大学)

本発表では、日本語の思考動詞“思う”に焦点を当て、自然談話データ全体における出現環境とその機能を探る。データは、発表者(編)によるTUCSJコーパス、TEQCSJコーパス(2012-14 科研費による成果)を用いる。全57組2889分(約48時間)の対面会話(2人対話、3人会話)のそれぞれに、音声(非圧縮形式)、ビデオ、G.Jefferson(2004)による転記システムに基づい

た転記が施されている。日本語の場合、思うは、「思います、思いました」等の終了形式の他に、中途終了形式’思っで’が、従属節としてではなく主節を伴わずに、「言いさし」による言い終わりとして機能する。さらに、日本語の場合、「思う」の補文部は、思考動詞“思う”に先行して現れるため、被引用部の開始部はイントネーション、ピッチ切り替え等の音声手段によって表されることがある。本発表では、「思う」とその補文部の音響特徴を観察することにより、機能と音響特徴の対応について指摘する。

Jefferson, Gail (2004) Glossary of transcript symbols with an Introduction. In G. H. Lerner (Ed.) *Conversation Analysis: Studies from the first generation* (pp. 13-23). Philadelphia: John Benjamins.

「日英語ナラティブにおける思考動詞の出現位置」

講師 野村佑子 (順天堂大学)

本研究では、日英語母語話者が絵カード15枚のストーリーを説明するナラティブデータを用い、両言語の思考動詞に関する違いを示す。日本語ナラティブではキャラクターの心内発話が高頻度で引用された(野村2007[1])。つまり、日本語ナラティブの方が思考動詞を多用しながらキャラクターの行動を説明していく傾向があり、英語ナラティブでは同様の傾向は見られない。本研究では、思考動詞が用いられた箇所を抽出し、その出現位置を確認したところ、日本語ナラティブでは主に従属節に現れることが明らかとなり、主節に来る動詞で示される行動の根拠を説明する役割を果たしていると考えられた。これに対し、英語ナラティブでは思考動詞は、主節に用いられることが多く、日本語の思考動詞とは異なる振る舞いが観察された。

[1] 野村佑子. 2007. 「語り手は何に注目するのか? —引用から見る日米語のナラティブ—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第13号. 83-93.

「英語および中国語の会話における思考動詞の内容節について」

講師 遠藤智子 (筑波大学 (非常勤))

日常会話においては発話の内容に対する認知的態度を指標する表現がしばしば用いられる。アメリカ英語では *I think*、標準中国語(普通话)では“我觉得 (wo juede)”が他の表現と比べ際立って頻度が高いことで知られている (Kärkkäinen 2003[1]; Endo 2013[2])。本研究は、これらの表現が日常会話において使用される際、認知的態度を標識する対象の内容にどのような特徴があるのかを明らかにする。会話コーパスから抽出されたデータに対し、内容節の主語や述語および他の共起成分を計量的に分析した結果として以下のことを示す。中国語の我觉得は多くの場合に第三者に対する強い評価と共に用いられ、評価的スタンスの表明に伴う意見対立の緩和の効果を持つ場合が多数を占める。アメリカ英語の *I think* は、評価表現との共起も見られる一方、現在や過去の事態の叙述と共に共起する場合も多く、確信度の低さを標識する使い方も一般的である。

[1] *Epistemic stance in English conversation*. Benjamins. [2] “Epistemic stance in Mandarin conversation”. In Pan and Kádár (eds.), *Chinese Discourse and Interaction*. Equinox.

「*I think*のパーティクル化について：位置による機能の違いを探る」

講師 佐藤詩恵 (立命館大学)

本研究では、*I think*が発話文頭、文中、文末において異なる意味機能を持つことを示し、相互行為の観点から「パーティクル」として作用している点を明らかにする。これまで *that*節を伴わない *I think* については様々な用語が提唱され、その意味機能や関連する文法化現象について多くの分析がなされてきたが、文中や文末に出現する *I think* については体系的な分析にまで至っていない。本研究では、コーパスデータをもとに発話文頭、文中、文末の各所に出現する *I think* の用例を考察し、位置別に機能を整理した。結果として、*I think* が一つのパーティクルとして固定化し、文頭では主観的スタンスを明示する機能、文中では部分的強調やトピックマーカ―など情報の流れを操作する機能、文末ではコミュニケーションの基盤となる協調の必要性や参与枠組みに対する話者の理解を示す機能を持つことが明らかとなった。

C室 (11月12日午後)

「移動をめぐる諸問題」

司会 高野祐二 (金城学院大学)

生成文法はその当初から、句構造と移動の理論を発展させてきた。ミニマリスト・プログラム以降では、移動のメカニズムについて、移動と一致(照合)の関係、移動と統語構造(ラベルを含む)の関係、移動が意味解釈に与える影響、といった観点から様々な研究がなされている。その一方で、理論的・経験的に不明な点も多く、興味深い問題が残されている。

本シンポジウムでは、3名の講師が移動にかかわる異なる側面を取り上げ、それぞれの視点から問題提起と提案をする。さらに、ディスカッションによる議論を通じて、移動をめぐる問題に対する理解を深め、統語理論研究の進展に寄与することを目指す。

「移動とラベル付けの新たな可能性」

講師 高野祐二 (金城学院大学)

本発表では、移動とラベル付け(Chomsky (2013[1])など)に関して新たな可能性を探る。日本語では、焦点位置に複数の要素が自由に現れる多重分裂文が可能である。日本語の多重分裂文には様々な興味深い特性が観察され、それらは人間言語の統語メカニズムを解明する上で貴重な経験的基盤となり得る。本発表では、再構築効果と島の効果に注目し、日本語多重分裂文の新たな特性を指摘する。それらの特性は、分裂文の焦点となる要素が、単一の場合と複数の場合で、移動とラベル付けに関して異なる性質を持つことを示しているように思われる。この性質を説明するために、多重分裂文の焦点要素はラベルを持たない構成素をなし、この構成素は派生の途中で一種の側方移動(Nunes (2004)[2]など)により形成されるという分析を提案し、その帰結を検討する。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua*. [2] *Linearization of Chains and Sideward Movement*, MIT Press.

「一致と転送：EPP、ECPおよびCEDに対する非ラベル付けアプローチ」

講師 岡俊房 (福岡教育大学)

主語の様々な特異性を統一的に説明するために、Chomsky (2014[1])は、主語がSpec-Tに移動するのも、そこから移動できないのも、すべてラベル付けのためであるとするが、本発表では、Collins (2002[2])等の、そもそもラベルは一切必要ないとの提案に従い、「非」ラベル付けアプローチを探ることとする。

より強い局所性を課す素性一致システムのもとで、主語は、Cと直接AgreeするためにSpec-Tに現れ(EPP)、CとAgreeすると即座にTPがTransferされ、Spec-Cに移動するタイミングを失う(ECP)。また、主語はTともAgreeするが、そのためには事前に主語DP内部でTransferを適用してDをTに近づける必要があり、結果的に主語からの抜き出しが困難となる(CED)。付加詞についても同様。さらに、ラベル付けに依存しない線的順序づけについても考察する。

[1] “Problems of Projection: Extensions” [2] “Eliminating Labels” in *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*.

「日英語における非頭在的演算子移動の分配/関数解釈と局所性の分散的消滅」

講師 浦啓之 (関西学院大学)

数量詞を含むwh疑問文の解釈の曖昧性をwh疑問詞の数量詞に対する量化依存の有無に帰する方策(Chierchia 1993[1])では、数量詞依存解釈には更に分配的及び関数的解釈が可能であるとされている。本発表では、wh-in-situやparasitic gapに代表される非頭在的演算子の移動を伴う構文におけるwh疑問詞の2種の数量詞依存解釈が、様々な統語環境によって双方あるいはいずれか片方のみが可能となる事実とそれらが同様の統語環境下であっても言語によって違いが生じる事実を観察し、演算子の頭在的移動後に生じたコピーもnarrow syntaxで(音声結果を伴わずに)移動していること及びそのようなコピーが複数存在する場合にはそれらが(コピーのラベル付与に起因する統語的性質から)generalized transformationにより融合し得ることを共に指定すれば上記観察事実がうまく説明できること、を論じる。

[1] Chierchia, G. "Questions with Quantifiers" [2] Pesetsky, D. *Phrasal Movement and Its Kin* [3] Saito, M. "*Wh*-Quantifier Interaction and the Interpretation of *Wh*-phrases"

D室 (11月13日午後)

"Exploring the Notion of 'Perfection' in Language Design"

Hisatsugu Kitahara (Keio Univeristy)

This symposium explores the notion of "perfection" in language design. Just what does it mean to say that language is something like a perfect system in satisfying certain conditions imposed from the outside? The goal of this symposium is to selectively review and clarify some of the arguments for this fundamental idea in the Minimalist Program, especially as it relates to the nature of explanation in the sciences generally and as it relates also to the central role played by the quest for simplicity in constructing a broadly explanatory linguistic theory, including rational hypotheses regarding the evolution of the human language faculty.

"Perfection is Simple"

T. Daniel Seely (Eastern Michigan University)

'Perfection' has been a guiding force for linguistic research within the MP for some 20 years. Thus, echoing the suggestion in Chomsky (1995) that "language is something like a perfect system," Chomsky (2013) notes "[the MP]... begins by asking what an optimal solution would be to the conditions that must be satisfied by GPs [generative procedures] ... we can contemplate a Strong Minimalist Thesis SMT holding that language is a perfect solution to these conditions..." We review the development of 'perfection,' considering certain changes in its conception over time. Our primary goal, however, is to carefully review the central arguments in support of this notion, focusing on the nature of explanation by simplification. A guiding theme of minimalist inquiry is that simpler is more perfect. UG is reduced to a single, simple operation (namely, Merge) which optimally satisfies 3rd

factor and interface principles. We examine the achievements of this research program and its prospects for the future.

"Eliminating C-deletion in the Syntax: Structure Building by Merge"

Miki Obata (Tokyo University of Science)

Chomsky's (2013, 2015) labeling algorithm provides a new possibility for eliminating ill-formed representations as labeling failure. One of those cases is the *that*-trace filter, which Chomsky (2015) puts into focus: TP in English can be labeled $\langle \varphi, \varphi \rangle$ by keeping a subject *wh*-phrase in its Spec, which can be executed by *C/that*-deletion in the syntax. However, *C*-deletion in the syntax, in fact, causes serious empirical problems regarding selectional restrictions and also involves unclarities concerning the operation and representational output and results of deletion of syntactic categories. Regarding this problem, I propose that *C* is not deleted in the syntax but is affixed by being externally pair-merged with *T* based on Epstein et al. (2016), which results in *C* being invisible as a phase head and disallowing appearance of the free morpheme *that*. The proposed analysis enforces structure-building by Merge, which leads to a simpler, i.e. more perfect, formal characterization of human linguistic knowledge systems.

"Toward a Restricted Theory of Formal Features"

Masanobu Sorida (Sophia University)

It is natural to assume that assigning a label to every term of a transferred syntactic object (SO) is a requirement by the interface systems that interpret the SO. It also seems not implausible to speculate that the role of features visible to syntactic operations (i.e., formal features) is to provide interpretable (or labeled) SOs to the interfaces. Given these considerations, I suggest the thesis (1):

- (1) Only features that contribute to labeling are genuine formal features.

Under this thesis, I argue that Case-features in Japanese and ϕ -features in English are genuine formal features, contributing to labeling, and that

Japanese lacks ϕ -features, following Fukui 1986. One remaining question is Case-features in English. I argue that they should be relegated to PF, having recourse to two independently-motivated assumptions (i) Case-valuation is dependent on ϕ -agreement, and (ii) narrow syntax has a phase-level memory.

E室 (11月13日午後)

“Polarity-Sensitive Items: Their Forms, Meanings, and Functions”

Osamu Sawada (Mie University)

In this symposium, we will investigate the forms, meanings, and functions of polarity-sensitive items. In particular, we will focus on the phenomenon of negative polarity items, positive polarity items, scalar particles (e.g. *even*), and expressives (e.g. negative *totemo* ‘very’), and will consider the following questions: (i) In what environments can these expressions appear?; (ii) How can we analyze the variation in the meanings and distribution patterns of polarity items?; and (iii) What role do polarity-sensitive items play in discourse?

Many important theories have been proposed for the syntax, semantics, and pragmatics of polarity items (e.g. Fauconnier 1975; Horn 1972; Ladusaw 1980; Linebarger 1980; Progovac 1994; Krifka 1995; Giannakidou 1998; Chierchia 2013). In this symposium, we will reevaluate the theories of polarity items from new perspectives and try to provide a new direction for the study of polarity in natural language.

“Structural Aspects of NPI Licensing in Japanese”

Hideki Kishimoto (Kobe University)

In this paper, I will take a close look at negative polarity items (NPIs) in Japanese. I argue that NPIs in Japanese fall into two types — one is an argument type, which is licensed with reference to its surface-position (i.e. this type of NPI is licensed in a position in which it appears after A-movement, if it applies) and the other is a floating modifier type, which can be licensed in its underlying

theta-marking position (the position before A-movement takes place). The syntactic behavior of these two types of NPIs allows us to assess the structural organization of clauses in Japanese. In particular, this paper shows that the EPP requirement obtains when tense participates in Case valuation, and that subjects are A-moved into Spec-TP when the clause contains a nominative argument licensed by T.

[1] Kishimoto, H. (2014) Another look at Negative polarity items in Japanese. *J/K Linguistics* 23. [2] Kishimoto, H. (to appear) Negative polarity, A-movement, and clause architecture in Japanese. *JEAL*.

“Semantic and Pragmatic Analysis of *Wh-ka* in Japanese”

Ikumi Imani (Nagoya Gakuin University)

In this presentation, we will examine why there are cases where *wh-ka* in an adverbial position behaves differently from *wh-ka* in an argument position, as indicated in (1) and (2): (1) Nani-ka nomi-tai (“I want to drink something”), (2) #Nani-ka-wo nomi-tai (ibid.). Sudo [1] offers a new analysis of *wh-ka* based on the concept of similar alternatives, but he does not differentiate *wh-ka* in (1) from *wh-ka* in (2). We claim that the difference between (1) and (2) corresponds to two types of disjunction, that is, to whether a logical space is partitioned or not. We will also demonstrate that our analysis can explain why “Nani-ka-ga kinoo-site inai (“Something is not working”)” is OK, while “Nani-ka-ga okasiku-nai (“Something is not wrong”)” usually sounds odd. This is part of a joint-research project with S.Kaufmann and M.Kaufmann.

[1] SUDO, Y (2010) “Wh-ka indefinites in Japanese,”handout from the Workshop on Epistemic Indefinites held at University of Göttingen.

“Scalar Particles and Polarity Sensitivity”

Kimiko Nakanishi (Ochanomizu University)

It has been claimed that there is a close connection between scalarity and polarity ([1],

among others): cross-linguistically, it is common to find a polarity item that consists of a scalar particle (like *even*, *-mo*) and a predicate expressing minimality (as in *hito-ri-mo* ‘(lit.) one-CL-even’). In this presentation, I show that the scope of scalar particles accounts for the distribution of polarity items. More specifically, following [2], I argue that the semantic conflict between a scalar presupposition and the meaning of minimality explains the limited distribution of polarity items. The proposed analysis would predict that other focus particles that introduce a scalar presupposition should be able to serve as a polarity item when combined with a predicate of minimality. However, it is not the case (e.g., **hito-ri-sae*). I address this issue by examining independent properties of various scalar particles.

[1] Chierchia, G. (2013) *Logic in Grammar: Polarity, Free Choice, and Intervention*. Oxford. [2] Lahiri, U. (1998) “Focus and negative polarity in Hindi,” *NLS* 6.

“Expressives and Polarity Sensitivity”

Osamu Sawada (Mie University)

This talk investigates the property of expressive negative polarity items (NPIs), with special reference to the Japanese negative use of *totemo* ‘lit. very.’ The negative *totemo* is similar to typical/strict NPIs (e.g., minimizer NPIs, *wh-mo* ‘wh-even’ in Japanese) in that it can only appear in a negative environment. However, unlike typical NPIs, its meaning is not part of “what is said.” I argue that the negative *totemo* is not logical NPIs which are licensed by negation or downward entailing/non-veridical operators (Ladusaw 1980; Giannakidou 1998). Rather, it is a conventional implicature-triggering expression/expressive (e.g., Potts 2005), which intensifies the unlikely/impossibility of a given proposition and refuses to update the common ground with the proposition. This paper claims that there is a new class of NPIs—expressive NPIs (more specifically, oppositive NPIs)—whose polarity sensitive behavior is lexically constrained by its pragmatic/not-at-issue meaning.

[1] Giannakidou, A. (1998). *Polarity Sensitivity as (Non)veridical Dependency*. Benjamins. [2] Potts, C. (2005). *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford.

F室 (11月13日午後)

「意味・機能の変容の諸相」

司会 岡田禎之 (大阪大学)

言葉の意味・機能は様々に変容していくものであるが、本シンポジウムでは、3名の講師がそれぞれ「lexicalな要素からlexicalな要素への変容 (名詞語彙の意味拡張) (岡田)」「lexicalな要素からfunctionalな要素への変容 (否定表現の文法化現象) (家入)」「functionalな要素からfunctionalな要素への変容 (語法形式に現れる引用行為の変化) (山口)」というlexical-functional continuumに認められる意味・機能変容の三様式を取り上げる。分析対象領域も語彙レベル、文レベル、テキストレベルという三層に渡り、言語変容の広がりを俯瞰できるものとなるが、それぞれの変容がどのような動機付けに基づいて生じるのか、ということ各講師が考察し、参加者とともに対話を試みたい。

「身体部位名詞の意味拡張と連語における意味分布」

講師 岡田禎之 (大阪大学)

本発表では、英語の身体部位名詞をいくつか取り上げ、それが文内で項要素として用いられているか、付加詞要素として用いられているかによって、その拡張解釈の可能性には非対称性が認められることをコーパス(BNC)データを利用して確認した後、同様の非対称性が連語関係においても認められることを見ていく。いくつかの辞書に記載されている2語からなる連語のみをここでは取り上げるが、右側主要部要素として機能する場合と、左側の修飾要素として機能する場合では、拡張解釈のタイプ頻度には違いが認められる。述語の選択関係に基づくpredicational contextにおいても、並列的な連語関係に基づくmodification contextにおいても、並行的な分布が認められ、またこの2つのcontextの間には、いくつかの相関関係が認められる。何故このような非対称性が認められるのか、

どのような相関性があるのか、ということについて発表者なりに考えてみたいと思う。

「英語の否定構文と Jespersen のサイクル」

講師 家入葉子 (京都大学)

Jespersen (1917[1]) は、英語の否定構文が、否定の副詞 *ne* を動詞の前に付加する古英語の *ic ne secge* のような構文から、動詞を *ne* と *not* で挟む *I ne seye not* の構文を経て *I say not* に至ったことに言及し、さらに次の段階で生じた *I do not say* とその縮約形の *I don't say* を加えて、*ne* → *ne* … *not* → *not* → *do not* → *don't* という変化の過程を整理する。これはのちに「Jespersen のサイクル」と呼ばれるようになり、ほぼ1世紀が経過した現在でも、その詳細を議論の対象とする研究は少なくない。たとえば、van der Auwera (2009[2]) は否定の強弱に触れながらサイクル全般を再検討する試みであり、Larrivée & Ingham (2011[3]) は英語の否定構文の史的变化そのものをテーマとする論文集である。本発表では、初期近代英語期のデータを中心に扱いながら、英語の否定構文における一連の変化を、文法化や否定の強弱の視点から再検討したい。

[1] *Negation in English and Other Languages* [2] “The Jespersen Cycle” [3] *The Evolution of Negation: Beyond the Jespersen Cycle*.

「引用の3つのかたち—メタ言語の機能的類型—」

講師 山口治彦 (神戸市外国語大学)

従来の引用や話法の研究は、第3者が過去に発したことばを報告・再現する例を取り扱うのが常であった。しかし、そのような遠隔化された (*displaced*; Chafe (1994[1])) ことばだけでなく、(1) のように対話者が今しがた発したことば—近接的な (*immediate*) ことば—もしばしば引用される (繰り返される)。

(1) You said you're from Kanazawa?

このような場面では、引用は報告再現のために行われるのではなく、何らかの伝達不良を取り除く目的で用いられる (山口 (2009[2])). つまり、引用はどのようなことばを引くのかによって、その機能が異なるのである。

本発表では、(2) の下線部のようなさらに別の引用形式、引用実詞 (*quotation substantive*; Jespersen (1913[3])) をも取り上げ、引用という行為 (ひいてはメタ言語的行為一般) が取り込む (言及する) ことばの違いによってどのように変化するかを観察する。

(2) “I am afraid.” “I don't want any I am afraid.”

[1] *Discourse, Consciousness, and Time* [2] 『明晰な引用, しなやかな引用』 [3] *A Modern English Grammar on Historical Principles, Vol. 2*